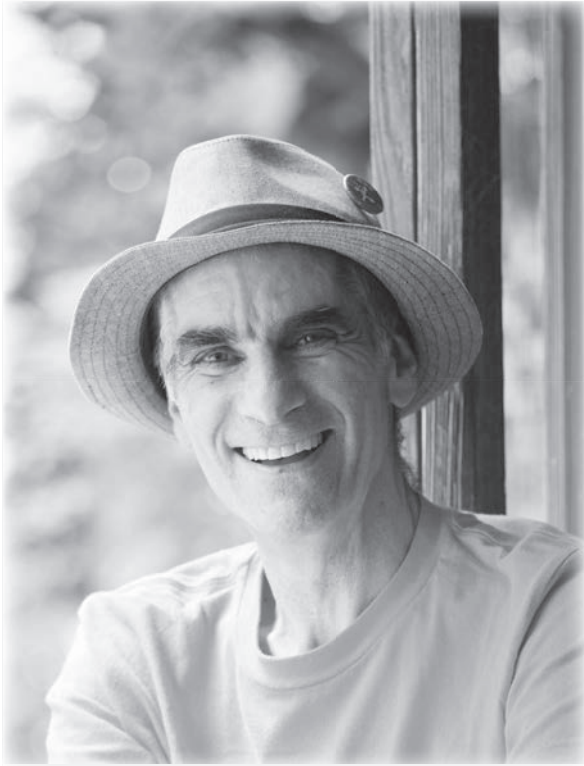


さいたまここに人あり

国のために死ぬことは

すばらしいのか

現在のイスラエル・パレスチナ問題を考える



写真…亀山ののこ

家具職人・皆野町在住

ダニー・ネフセタイさん

「自国を守ることが使命」

私はイスラエル中部にあるモシヤブ（農村共同体）で生まれました。イスラエルの建国を発端に長年対立を続けるイスラエルとパレスチナの紛争を、幼い頃より目のあたりにしてきました。ですから、「戦争が起きたら自国を守ることが使命」だと教えられてきました。イスラエルには徴兵制があり、18歳になると男性は3年、女性は2年の兵役につきまします。私は国を守るために1975年から3年間イスラエルの空軍に所属し、戦闘機のパイロットを目指していました。入

隊したのは18歳のときでした。もしこの期間に大きな戦争が起きていたら、私も疑問を持たずに相手を殺していたと思います。

イスラエルの若者は退役後、数年間「退役旅」をして見聞を広めます。私はその訪問先にアジアを選び各地を旅しました。そのなかで日本を訪れ、各地をヒッチハイクで旅をしました。その後、神奈川県家具会社に勤め、日本語学校で語学を学ぶなかで現在の妻（吉川かほるさん）と出会い結婚しました。結婚を機に1988年、皆野町金沢に移り、1999年に夢だったログハウスを手づくりして、自然に囲まれた暮らしを手にしました。ここで木工房「ナガリ家」を開業して、注文家具などの製造をおこないながら生活しています。

イスラエルでの 徹底的な教育

2008年12月、イスラエル軍のわずか3週間の攻撃で、345人の子どもを含む1400人のパレスチナ人が亡くな

りました。私はこのガザ攻撃以後、子ども時代から戦争について常に言われてこたがはたして本当なのかと疑うようになりました。私はガザ攻撃以前の、より規模の大きな戦争に対して反対の声をあげることはありませんでした。戦争の邪悪さに気付かず、戦争の起きる理由を考えようともしなかつたのです。なぜならイスラエルが戦争に望むのはそこに正当な理由があると信じていたからです。

ユダヤ人は第二次世界大戦中、ホロコースト（大量虐殺）で一説には600万人ともいわれる命が失われました。そのなかには私の親族も含まれています。このため多くのイスラエル人は二度とこのような被害に遭わないための国防意識を高めることを目標にしてみました。国民が一つの方向に向かせるために徹底的な教育がおこなわれました。

イスラエル北部のテルハイには「吠えるライオン像」があります。そこに刻まれているのが「国のために死ぬのはすば

らしい」という言葉です。イスラエルの小学校で、毎年3月「テルハイの日」に、先生が黒板に書く言葉です。また小学校の校庭には戦死した卒業生の名前を刻んだ顕彰碑があります。碑には余白まであります。さらにイスラエル軍が使用した古い大砲、戦闘機が置かれています。この環境で毎日を送る小学生は「国のために死ぬのはすばらしい」と考えるようになるのです。戦死はもつとも名誉ある死だと、国民共通の認識になっています。そして「戦争を望むアラブ人と違って、ユダヤ人は平和を愛する優れた民族である」と信じ込まされ、選民意識を持たされるのです。

1967年以降イスラエルは入植地を拡大し、パレスチナ人の多数を殺すこともありました。なぜならばこの地域は2000年以上前に神がユダヤ人に与えた土地であり、パレスチナ人こそが不法に占拠していると考えられています。こうして多くの人が殺害されるなか、

プロフィール 1957年イスラエル生まれ。高校卒業後、徴兵制によってイスラエル国防軍に入隊。3年間空軍に所属。退役後アジアの旅に出て来日。1988年に「木工房ナガリ家」を開く。家具制作とともに各地で脱原発、人権、平和などの講演活動をおこなっている。著書に「国のために死ぬのはすばらしい？」（高文研）、新刊「イスラエル軍元兵士が語る非戦論」（集英社新書）は2023年12月14日に発売。

「自分だけが静かに暮らしているのか」と考え、活動をはじめました。

武力は憎しみの連鎖を招くだけ

昨年10月7日に起きたハマスの攻撃はイスラエル国内に激しいショックを与えています。イスラエルとパレスチナで多くの人が亡くなり、私もすごくショックを受け、心を痛めています。私の甥はハマスの攻撃で多数の死傷者を出したガザの東6キロのイスラエル南部の野外音楽フェスティバル会場にいました。彼は十

数時間のあいだ、畑に隠れて難をのがれましたが、彼の友人2人が犠牲になりました。ガザの近くに住み、自治体の福祉課に勤めている妹は、連日遺族を訪ね疲れ果てています。

私はガザを実行支配するイスラム組織ハマスによるイスラエル市民への攻撃を激しく非難します。しかしパレスチナガザ地区は、近年の状況だけを見ても16年にわたって封鎖され、「天井のない監獄」状態に置かれてきています。イスラエル

のメディアは地上侵攻のシナリオ一色です。政府は「地上戦でハマスをつぶす」と息まっています。イスラエル軍による地上侵攻の結果、電気が断たれ、水や食料がじわじわと尽き、まともに生きられないなか、病院まで攻撃され、小さい子どもも亡くなっています。しかしそれで解決するとは到底思えません。このことを体験したパレスチナ人はイスラエル人を憎み、憎しみが憎しみを生み、新たなテロがまた必ず起きます。

「武力は憎しみの連鎖を招くだけだ。対話や外交が大事」と発信している私に妹は「たくさんの人が死んでいるのに戦争反対の理想論しか発せられないのか」と言います。イスラエルの知人からは、「パレスチナの肩を持つのか」と批判されますし、イスラエル人から批判メールも届きます。ハマスの行為は想像を超える残虐行為で許せません。だからといってこのような残虐な報復がいい理由はどこにもありません。こんなときだからこそ戦争やテロがなぜ起きたのかを考え、対話や外交を通じて問題を解決していかなければ平和は築けません。いまこそ平和の発信が大事だと思います。

対話による平和を

イスラエルには「自国を守る権利がある」と主張し、アメリカがそれを応援し、「アメリカもそれを認めている」と攻撃を勢いづかせています。本来ならば「対話にもとづく」という選択が必要なのですが、「今度はもつとすごい爆弾を」「今度のもつと安全なシエルターを」となれば歯止めのかかない競争になります。イスラエルのメディアでは「いままでにないすぐれた武器で安全になる」という話をします。私は子どもの頃からそれを聞いていますが、すぐれた武器というものには破壊力も価格も高く、人が殺されるだけではなく、環境破壊もますます進むでしょう。「地球にやさしい戦闘機」「地球にやさしい戦車」はありません。人を殺し、ものを壊す戦闘機はかっこいいのでしょうか。日本の美術館に展示されている刀剣は美術品なのでしょうか。それとも人を殺す道具なのでしょうか。日本人は長い間「刀剣は美術品」という観念を受けてきたのではないのでしょうか。「文

化の日」には航空基地祭が開催されました。文化の日に展示された戦闘機は「文化」ということになるのでしょうか。

イスラエルとパレスチナの問題の未来は、ともに生きるか、ともに滅びるまで戦うか、この二つしかありません。実は1998年9月、パレスチナのガザ市と、イスラエル最大の商業都市テルアビブがスペインマドリッドで姉妹都市協定を結んだことがあったのです。このことをイスラエル人はほとんど知りません。これをいまこそ表に出すべきでしょう。イスラエル人とパレスチナ人、個人と個人ならば仲よくできるし、実際に友人としてつきあっている人も多くいるのを知っています。あくまでも対話による平和が訪れることを私は望んでいます。いまはまだ難しいですが、イスラエルとパレスチナがお互いに国家として認め合い、ともに生きていくことは可能です。

日本が同じ道を進まないために

日本に長年住んでいると、日本のなか

での矛盾も感じます。戦争が日常だった国に生まれた私は、とくに東日本大震災以降、日本に巣くう軍需産業と原発産業を強く意識するようになりました。二つの産業の共通点は、少数の人の幸福のために多くの人が不幸になることです。世界で起きる地震の20%は日本なのに、東京電力は「健康・安全」より「コスト優先」を選んでいたのでした。私は「原発とめよう秩父人」として、地域の人と活動しています。

日本に来たとき、日本国憲法9条「戦争放棄」の条文を不思議に思いましたが、いまではとてもすぐれた条文だと思えるようになりました。地域の9条の会、オール11区市民の会のなかでも活動を続けています。戦争は外交により止められるはずなのに、日本政府は危機をあとおり軍費を増やしています。日本はこのままイスラエルと同じ道を進んでしまっているのでしょうか。私も平和のための発信を続けていきます。みなさん、いっしょにがんばっていきましょう。

書籍紹介

ダニーさんのこれまでの生き方と考え方が書かれています。今回のインタビューを読んでさらにこの問題を深めたいと考える人はぜひ読んでいただきたいと思います。また平和問題を考える資料としても適切だと思います。県内の中学校や高校の図書館にもぜひ置いてほしい本であり、広く子どもたちにも読んでほしい本でもあります。

イスラエル軍元兵士が語る非戦論
ダニー・ネフセタイ 著 集英社新書

